

◇天孫三人（饒速日、天火明、火瓊瓊杵）／忍穗耳と天孫の天降り

①「**「記紀」**や『**先代旧事本紀**』を丹念に調べると、天孫（皇孫）は高千穂宮から吾田に降臨した火瓊瓊杵独りと思ひ込みがちだが、饒速日と天火明（彦火明）も天孫だったのは紛れもない事実だ。この二人は火天神天鹿兎山（天照大神の嫡子）の腹違いの天孫として生まれ、成長後、二人揃って忍穗耳に養子入りして、そこでも天孫（皇孫）と呼ばれてきた。

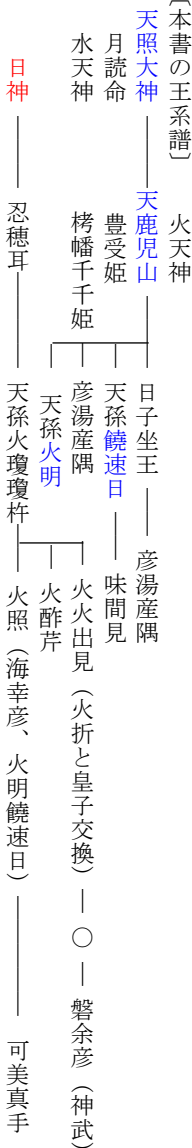
その一人の饒速日は、『先代旧事本紀』に天照国照彦火明櫛玉饒速日として登場してくる。

「天照太神、詔して曰はく、『豊葦原の千五百秋の瑞穂国は、吾が御子、正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊の知すべき国なり』と言寄さし詔ごと賜いて、天降したまう時に、高皇産霊神の児思兼神おもいかねの妹万幡豊秋津師姫命（栲幡千千姫）を妃と為して、天照国照彦火明櫛玉饒速日尊、誕生す」

この天火明は、【海部氏系図本系図】に、始祖彦火明〇―〇―二世孫倭宿禰―武振熊とある海部氏始祖の彦火明のことで、『日本書紀』にはこのようにある。

「天忍穗耳尊、高皇産霊尊の女、栲幡千千姫を娶り、妃としたまいて児を生ましむ。天照国照彦天火明命と号く。是尾張連等が遠祖なり。次に火瓊瓊杵尊・・」

〔本書の王系譜〕



②忍穗耳、及び天孫饒速日・天孫天火明・天孫火瓊瓊杵ら天神の御子は、日神から御璽や宝物を

賜り、天宮高千穂宮から東や南に天降ったのである。以下、時代順に列挙したい。

〔忍穂耳の天降り〕、二一〇年代前半、大己貴に攻め立てられた天照大神は、妻の日神と盟約するや、高千穂宮に向いて高皇産霊と名のり、忍穂耳の大倭降臨を取り決めた。ところが忍穂耳が準備を整えていると、亡き天鹿兎山の遺児二人を天孫として押しつけられた。親元を離れたくなかった忍穂耳は、自分に代えて天孫（饒速日）降臨を日神に願い出たのだった。

〔饒速日の天降り〕、そこで、天孫饒速日が瑞宝十種、火天神の御子と印す天羽羽などを賜って大倭国鳥見に天降り、長スネ彦の妹を妃に娶ったが、妃の懐妊中に逝ってしまった。

『先代旧事本紀』、「時に正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊、奏して曰さく、『僕將に降らむと欲い、装束う間に生れし児あり。これを以て降すべし』とまうす。詔して之を許したまふ。

天神の御祖、詔して、天璽の瑞宝十種を授く。・・饒速日尊、天神の御祖の詔をうけて、天の磐船に乗りて、河内国河上哮峰に天降り坐し、則ち大倭国鳥見の白庭山に遷り坐す。・・饒

速日尊、便ち長スネ彦の妹御炊屋姫命を娶りて妃と為し、妊胎したまふ。未だ産む時に及ば

ざるに、饒速日尊、すでに神損去亡坐しぬ、

後日、饒速日が御炊屋姫の夢の中で教えて言うには、『我が児に瑞宝を授けおくように。』

ついで登美白庭邑に墓を造り、天鹿兎弓・天羽羽矢、神衣・帯・手貫を副えるように』と。

〔忍穂耳の再度天降り〕、そこで忍穂耳が降臨を試みたが、大己貴に潰された。高皇産霊が葦原中つ国平定を決断して、経津主・武甕槌ら大軍を出雲に送り込むと、大己貴は平身低頭して国譲りを誓った。その直後、忍穂耳が再び大倭降臨を試みたが、またも大己貴と大物主に潰された。

〔火瓊瓊杵の天降り〕、二二〇年代前半、父に代わって、天孫火瓊瓊杵が大倭に天降って行こうとしたが、天火明を大倭に迎えたい大己貴らに妨害され、熊襲の吾田に降臨することになった。

不憫に思つた天照大御神と高皇産霊は、火瓊瓊杵に対して天（日）と日高の一派、日隈を添え与えた上で、高皇産霊名代としての天叢雲劍（草薙劍）・八咫鏡（日隈再興を願う日前鏡）・勾玉など三種の宝物、さらに火天神の御子と印す天鹿兕弓・天羽羽矢を授けて命じた。

「吾田の日前国は、わが子孫の王たるべき地なり。皇孫、そこに天降つて治めなさい。

天つ日継ぎを重ねることで、天壤（天地）^{あめつち}が千代に八千代に栄えますようにと祈りつつ、この八咫鏡を私の御魂と思つて祀り続けるように。

天孫には日隈再興を託したのだから、熊野櫛御氣野神像の日矛も授けておく」

その裏で日神は、この鏡と日矛に対して日隈・日前再興の願いを密かに込めていた。

「天火明の天降り」、同じ時期、天孫彦火明は出雲や播磨で大己貴から帝王教育を受けた後、丹後に移った。

『播磨国風土記』飾磨郡、「昔、大汝命の児・火明は強情で、行いも荒々しかった。父はこれを憂い、遁れ棄てようと因達の神山に到り、船を出した。

火明が水を汲んで還ると、船が岸から離れていた。火明は大いに怒り、船に追い迫つた。このため大汝の船は進むことができなくなり、うち破られた」

③ちなみに勘注系図の彦火明は、天孫天火明ではなく、火瓊瓊杵の児の海幸彦である。

【勘注系図】始祖彦火明―兒天香語山―孫天村雲―天忍人（亦の名倭宿禰）―

「記紀」などは火瓊瓊杵と木花開耶姫の間に生まれた三皇子について、このように伝える。

『日本書紀』火スセリ、火火出見（火折）、火明（火照、海幸彦、尾張連の祖）

『先代旧事本紀』尾張氏系譜、饒速日命亦名天火明命―兒天香語山命―孫天村雲命―天忍人国造本紀、「天香語山は天照大神のひ孫・饒速日と天道姫の間に生まれた。亦の名は高倉下」

「火明饒速日（海幸彦）の天降り」、勘注系図の彦火明は海幸彦である。彼は日向から丹波に立ち

寄つて饒速日も襲名した後、二四七、八年頃に大倭に降臨してヒミコと謁見し、日本家を建てるよう命じられた。

『但馬故事記』、「饒速日は勅と瑞宝十種を奉じて妃天道姫や隨身らを率い、丹波真名井原、ついで生駒に天降つた。天道姫が丹波で産んだ児を天香語山、そのまた児を天村雲という」

「神武紀」、「塩土老翁に聞きき。『東に美き地有り。：其の中に亦、天磐船に乗りて飛び降る者有り』といひき。余謂うに、・・その飛び降るといふ者は、是饒速日と謂うか、

「時に長スネ彦、・・天皇に言して曰さく。『嘗、天神の子有しまして、天磐船に乗りて、天より降り止でませり。号けて楡玉饒速日命と曰す。・・』」

この饒速日と三炊屋媛は、『先代旧事本紀』の天孫饒速日や御炊屋姫と経歴が異なっており、同一人物ではない。先代の饒速日や御炊屋姫を襲名した人物である。

結局、本系図の彦火明は天孫天火明、勘注系図の彦火明は火瓊瓊杵の児で海幸彦の火明饒速日なのだ。



忍穗耳 天照大神 饒速日 火瓊瓊杵 彦火明 日神 火火出見 海幸彦
 (火明饒速日)の天降り